VOICE OF LIFE

［ボイス・オブ・ライフ］

02

2021.SUMMER

Take Free

世界に目を向け、未来を見つめる。

東日本大震災から10年

それぞれの心の秒針

取材／安田菜津紀・佐藤慧

Dialogue for People

震災から２年後の陸前高田市。色彩を失った街跡に、ある日突然シロツメクサが咲き広がった。

東日本大震災から10年

それぞれの心の秒針

悲しみに沈む時間、悼む日々を大切にする

2011年3月11日、津波警報の想定を遥かに超えた大津波が、東北沿岸の街々を襲った。僕（佐藤慧）はそのとき、取材でアフリカ南部、ザンビア共和国に滞在していた。国際ニュース越しに届いた津波の映像は、現実のものとは思えなかった。当時岩手県陸前高田市に住んでいた両親の安否を確認するため緊急帰国、東京から一路陸前高田市を目指した。あらゆるものが叩き潰された光景に、シャッターを切る手が震える。幸い父は一命を取り留めたものの、母はそれから1ヵ月後、川の上流9km地点の、瓦礫と泥土の下から変わり果てた姿で見つかった。

最愛の人を失った父の悲嘆は深く、周囲から届く「復興を！」「頑張れ」という言葉に押しつぶされそうになりながら、日々涙をこぼしていた。力強く前を向くための言葉は、たしかに必要とされることもあるだろう。しかし、その言葉の重圧に苦しむ人々を置き去りにしてしまっては、「復興」という言葉も虚しく響かないだろうか。

数年後、心身共に衰弱した父も他界した。そんな父が悲嘆に沈む姿にシャッターを切ったことがある。見ているだけでも、胸が締め付けられるほどに苦しい父の涙だったが、それでも僕がレンズを覗き込んだのは、それが単に「苦しみ」だけを表しているものではないと感じたからだ。この悲しみの深さは、母への愛の深さでもあると気づいた瞬間だった。悲しみに沈む日々は、愛する人と生きてきたこれまでの日々を追憶し、その悲しみも喜びも、静かに深く心に染み渡らせる、かけがえのない時間でもあったのだ。

佐藤の父の悲嘆は愛の深さも物語っていた。

心が刻む秒針の速度はそれぞれ違う。「10年」という外面的な区切りだけで「復興」を考えるのではなく、こうした悲しみに沈む時間、悼む日々を大切にする先にこそ、「復興」があるのではないだろうか。

命の犠牲の上に成り立つ教訓があってはならない

宮城県石巻市、危険を知らせる津波警報が防災無線を通して街に鳴り響く中、日和幼稚園の園バスは子どもたちを乗せ、坂を下って海側へと向かっていった。当時6歳だった佐藤愛梨（さとうあいり）さんは、このバスに乗っていたため、津波とその後の火災に巻き込まれ、4人の園児と共に犠牲となった。

いったいなぜ、バスは海側へと向かってしまったのか。遺族の問い合わせに対し、園はA4一枚の「避難マニュアル」を提示、その中には、園児は保護者の迎えを待ってから引き渡すことが定められていたが、そのマニュアルの存在自体、園の関係者にさえ十分に共有されていなかったという。

日本の認可保育所は、毎月1回の避難訓練の実施が義務付けられている。一方で幼稚園は、年2回以上の避難訓練が義務付けられているが、これ以外に訓練を義務付ける規定はない。「子どもたちにとって10回の開きって大きいですよね。せめて、命を守ることに関しては、一律にしてほしいという思いがあります」と、愛梨さんの母、美香（みかか）さんは語る。「命の犠牲の上に成り立つ教訓があってはならないと思うんです。娘たちは教訓になるために生まれてきたわけではありません。でも、せめてもの教訓として活かしてほしい、と思っています」。

美香さんは愛梨さんの遺品である靴を、震災伝承施設の展示へと貸し出している。「手放すときはもちろん葛藤しましたが、うちに置いておくよりは、多くの人に見てもらって、感じてもらって、考えるきっかけを作りたい、と思ったんです。未来を見据えたときに、また起こるであろう災害に、備えるべきものを備えてほしいんです。それを考えるきっかけを作ることができればと思っています」。

津波により壊滅した陸前高田市街地。

人間の愚かさや、命の大切さを考える場所に

福島県大熊町。東京電力福島第一原子力発電所の1号機

NEXT PAGE

VOICE OF LIFE

愛梨さんの亡くなった場所を訪れた美香さん。

取材 安田菜津紀

安田菜津紀（やすだ・なつき）／中東、東南アジア、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地の記録を続ける。TV、ラジオ番組などにもレギュラー出演中。

取材 佐藤慧

佐藤慧（さとう・けい）／アフリカや中東、東ティモール、自然災害の被災地などを取材。世界を変えるのはシステムではなく人間の精神的な成長であると信じ、紛争、貧困の問題、人間の思想とその可能性を追う。

愛梨さんの靴。

帰還困難区域内で活動を続ける木村さん。

から4号機までが、この町に立地している。震災発生の翌12日には原発1号機が水素爆発を起こし、その後3号機、4号機で相次いで爆発が起き、建屋上部が吹き飛んだ。事故の影響を受け、町全域が「警戒区域」に指定されたが、段階的に避難指示が解除されてきた。しかし「帰還困難区域」に指定されている地域は、その一部を除いていまだに除染作業等が続いている。

「ここに追悼施設をつくりたいというのは私のわがままでしょうか」、木村紀夫さんは娘の汐凪さんの慰霊碑に花を供えながらそう呟いた。震災当時、第一原発から僅か3ｋｍの地点に木村さんは住んでいた。慰霊碑はそこから歩いて数分の荒れ果てた土地にある。慰霊碑といっても、コンクリート片を置いただけの簡素なものだ。

当時小学1年生だった汐凪さんは、小学校での授業を終え、隣の児童館で遊んでいた。木村さんの父、王太朗さんが児童館へ駆け付けたが、いったん海の側の自宅に引き返すという王太朗さんの車に汐凪さんも乗り込み、そのまま行方不明となった。翌12日には原発事故により木村さんも避難を余儀なくされ、捜索を続けられなかった。その後王太朗さんと妻の深雪さんが遺体となって発見されたが、汐凪さんの遺体は見つからなかった。

それから数年、限られた一時帰宅の時間を使って汐凪さんを探し続けた。震災から5年9ヵ月後、汐凪さんの遺骨の一部が、泥だらけのマフラーの中から見つかった。しかし大部分の遺骨はいまだ見つかっていない。「あの時避難せずにすぐ汐凪を探していたら見つかったんじゃないか」、そんな後悔が木村さんには残る。

木村さんは原発事故の原因を、津波や東京電力だけのせいだとは思っていない。「自然に対する畏怖が足りなかったのも自分たち。原発の稼働を許し続けてしまったのも自分たち。そんな人間の愚かさや、命の大切さを考える場所にしたい」。

木村さんは現在「中間貯蔵施設エリア」となっているその土地で、いつかまた生活が営める日々を目標に、持続可能な社会の在り方を模索し続けている。未来は今の延長線上にあるのだから。

D4P Kitchen
by Kei Sato

世界各地を取材していると、色々な料理を口にします。それと同時に、「こんな食材があるなんて！」と、素材そのものに驚くことも。たとえばザンビア共和国などでは、芋虫も立派な食材です。慣れないと口にしづらいものですが、食べてみると以外と美味！カンボジアでは、大きな蜘蛛の唐揚げや、タガメの炒め物なども見かけます。見慣れていないものを食べるのは勇気のいるもの。お皿に山盛りの羽アリの炒め物には、なかなか食指が動きませんでした。けれど反対に、海の無い国々では、エビやタコなど、とても奇妙な生きものに見えるようで、「絶対食べたくない」という人も。そういえば、ゴボウも日本でしか食べないと聞いたことがあります。ところ変われば文化も変わり、それぞれの地域に合った様々な食材があるものです。まだ見ぬ食材を求めて（？）、今後も世界各地の取材を続けます！

BOOK OF LIFE

東北のことをもっと知りたい方に！

漫画

柴ばあと豆柴太（全3巻）

著：ヤマモトヨウコ
講談社

東日本大震災について書かれた本はたくさんあります。どれも大切な視点で書かれたものですが、今回紹介する漫画『柴ばあと豆柴太』は、その中でも「それぞれの目線」を丁寧に表現しています。震災により飼い主を失った豆柴の“豆柴太”は、同じく震災で娘と孫を亡くした“柴ばあ”と出会います。お弁当屋さんを中心に繰り広げられる、地域の人々の心の葛藤、日常の喜び。「被災地」「被災者」という大きな主語に覆われがちな、一人ひとりの日々の歩みを、豆柴太の目線から優しく綴ります。

編集後記

舩橋 和花 ／ D4P広報部

第1号の発行後、たくさんの方から応援のメッセージをいただきました。この場を借りて御礼申し上げます！
今回は、佐藤慧・安田菜津紀が10年間現地に通い、取材を続ける東北各地の声をお届けしました。私も2011年から3年弱、陸前高田に住み込んで支援活動に携わっていたのですが、任期を終えてからもお世話になった方々に会いにたびたび訪れています。なかなか往来のしづらい現在、本紙が東北沿岸の街や人、文化に出会う小さなきっかけになれたら幸いです。

Dialogue for People

NPO法人Dialogue for People（ダイアローグ フォー ピープル／D4P）
国内外さまざまな地域で社会課題の渦中にある人々を取材し、写真や文章、映像などさまざまな表現を通じて、「伝える」ことを主軸に活動するメディアNPOです。どこか遠くの問題に思えてしまう出来事について、誰もが考え、自分の役割を見つける機会を創造し、社会課題の解決につながるきっかけを生み出していきます。

VOICE OF LIFE バックナンバーもWEBで見られます！
d4p 検索 https://d4p.world

各国での取材をYoutubeで配信！

安田菜津紀と佐藤慧が、気になるニュースや出来事をラジオ形式で配信中。ゲストを迎える回ではインタビューを交えながら、様々なテーマを深掘りしていきます。

D4P YouTube Channel YouTubeで検索！
d4p 検索

取材・写真・編集・発刊：Dialogue for People ／ 企画・構成・デザイン：sai company